

Contents

VOICE 10年をふりかえって	1
VOICE's history	2
VOICE 07 Final—Together Again—	5
難しさに向かうこと (08)	8
ネストより 「弁護士と話そう」	12
活動報告 (2007年1~3月)	13
お知らせ	16

「VOICE 10年をふりかえって」

ベーすけ

1997年の秋頃だと思うのですが、「お楽しみ演芸会」をやるので、司会とピアノで出ないか、とのお誘いを受けました。音楽やドラッグショーなどを楽しみながら HIV/AIDS について考える、というコンセプトを説明され、それについては理解できたような、できなかったような、妙な感覚を抱いたのを覚えています。というのも、HIV/AIDS について考えるのだけど「学習会」ではなく、音楽やドラッグショーなどを楽しむのだけどそれが主眼ではない、というスタイルのイベントがそれ以前にはなく、具体的にイメージできなかったのです。しかし、翌年VOICEと名前を変え、回数を重ねるにつれて、このイベントの持つ「意味」というものを実感するようになりました。それについては後で述べるとして、そのオファーを受けたとき、正直ネーミングについては、「お楽しみ演芸会い〜？ なんじゃそれ！？」みたいな印象を持ったことを告白します（爆）。

次の年、「お楽しみ演芸会」は「VOICE」と突然カッコイイ名前にかわったのですが、「僕たちの声に、耳を澄ませて〜」というサブタイトルを見て、「なるほど、それでVOICEか」と深く納得したものです。VOICEではこれまで、ドラッグショー、吹奏楽、弦楽合奏、合唱、ピアノ、バンド、ヴォーカルソロ、ストリートダンス、スクエアダンス、ダンス(なんていったらいいのかな？ NONOCHICって…汗)、スライドショー、ビデオ上映、トークショー、抽選会(笑)など、いろいろなジャンルのステージがありましたし、それらのコラボレーションや、フィナーレでの合同演奏もありました。合同演奏では最後に客席と一緒に歌うというのも恒例で、「どんなときも」や「世界にひとつだけの花」などが歌われましたが、照れくさいと思いつつも、それはなかなか素敵なものでした。

さて、司会者としてステージ上でしゃべっているときは、お客さんの反応から感じられることといえば、「一生懸命ステージを楽しんでくださってるなあ」とか、「アタシのベ

しゃりで笑ってくれてヨッシャー！」みたいなことになるわけですが、アンケート結果を見せていただくと、このイベントの本当の意味を実感することができます。「HIV/AIDSについて真剣に考える機会となった」「これからはセーフアセックスを心がける」などという意見をたくさん目にする、やはりこのイベントの趣旨はきちんと伝わっているのだなと思って大変うれしいのですが、それ以上に私が重要だと感じるのは、「こんなにたくさん仲間がいるのかと思うと、とても心強く思えた」という意見が意外とたくさんあることです。仲間とのつながりというものが、人間が生きていくうえで欠かすことのできないということは明白です。私など、日頃二丁目にどっぷり浸かって生きていますので(笑)、半分麻痺しているのですが、日常生活でゲイの仲間とつながることが(いろんな意味で)難しい人たちがたくさんいるのだということを知ると、いつもそばに仲間がいることのありがたみを、またVOICEが、仲間がここにいるんだということを感じてもらえるひとつの場になった、ということへのよろこびを感じます。「ひとりじゃないんだ」という実感があってこそ、「人を大切にしたい」「自分を大切にしたい」、という思いが生まれ、それがセーフアセックスという行動へとつながっていくのだと思います。

「ひとりじゃないんだ、ここには仲間がいる。それが“Living Together”」。そんなことを身をもって感じることでできたVOICEに、初回からFINALまで毎回出させてただけで、本当に感謝しています。ありがとう、VOICE！

プロフィール

東京レズビアン&ゲイパレードの実行委員長を、2005・2006年の2年間務め、現在は東京プライド理事。セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク事務局長でもある。本業は高校の音楽教師。

VOICE's history

1997年に前身である「お楽しみ演芸会」として始まった、男性ゲイ・バイセクシュアル向けHIV啓発イベント「VOICE」。楽しみながらHIVについて考えるきっかけになる年に一度の一大イベントとして定着をしてきました。今回が10年目、「VOICE 07 Final」を開催して、VOICEとしてのイベントは終了することになりました。この10年の歴史のごく一部を紹介し、VOICE—10年—のために寄せていただいたコメントの一部をお届けします。

◆VOICE 10年の軌跡◆

各年のフライヤー、出演者、VOICEに合わせて制作し上映したビデオやパフォーマンス、制作した冊子やグッズなどの一部をご紹介します。

■お楽しみ演芸会

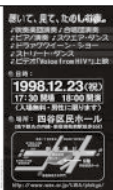


1997年12月6日(土) 18:30～
於: ビブランシアター

出演: ジュヌヴィエーヴ/
肉乃小路ニクヨ/バブ・リーナー (以上UPPER CAMP)/ペーすけ&どんちゃん/
スキンエコー/Wind Ensemble/
スライドショー: "AIDS Poster Project"

97～98のフライヤーはイラスト: Guy.H

■VOICE for Gay Friends



1998年12月23日(祝)
18:00～
於: 四谷区民ホール

出演: アナベラ/ジュヌヴィエーヴ/シンシア/肉乃小路ニクヨ/
ブルボンヌ (以上UPPER CAMP)/ストリートダンス/Edo 8s/
スキンエコー/The Wind Ensemble/ペーすけ

ぶれいす東京オリジナルビデオ: Voice from HIV+ (2人のHIV陽性者のインタビュービデオ)

■VOICE99～僕らの場所がここにある～



1999年12月4日(土) 18:00～
於: 四谷区民ホール

出演: アナベラ/エスラルダ/サセコ/
シンシア/肉乃小路ニクヨ/
バブ・リーナ/ブルボンヌ/メイミー/
ユリ (以上UPPER CAMP)/HIV GIRLS
(ピンクベア with JOROHS)/
スキンエコー/genetic LOAD/Edo 8s/
The Wind Ensemble/
BACKDRAFT BOYS

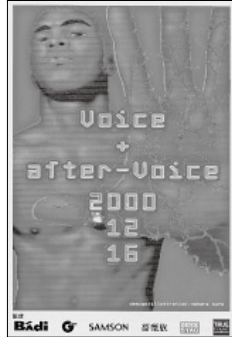
ぶれいす東京トークショー:
砂川秀樹&春日亮二

99～07のフライヤーは
イラスト: 野原くろ



「Hの強化書」Safer Sexにまつわる事例と
アドバイス集。
(イラスト: タカサキ ケイイチ)

■VOICE2000



2000年12月16日(土)
18:00～21:00
四谷区民ホール

出演: エスラルダ/シンシア/
肉襦袢ゲブ美/ブルボンヌ (以上UPPER CAMP)/genetic LOAD PROJECT/
Edo 8s/GALE/The Wind Ensemble/
スキンエコー/HOSSY/ペーすけ
二人芝居「PIECES」: 関根信一&荒俊樹



「Positive
Voices 17人
のHIV陽性
者の声」陽
性者の手記
集のルーツ
はここに



関根さん荒さんによる二人芝居
「PIECES」

■AFTER VOICE



2000年12月16日(土)
21:30～翌5:00 於: ACE

出演: G.O. Revolution/Babie no Bitch/
ピンクベア長谷川/ユニットバス/
精廉/DJ Junya/DJ HYGO-GO/
VJ NaokiT4U

この年は朝までAfter Voiceを開催。
ピンクベア(左)とMASA(ユニットバス)

■VOICE2001 Think Positive



2001年12月1日(土) 18:00～
於: 四谷区民ホール

出演: サセコ/肉襦袢ゲブ美/バラエ/
ブルボンヌ/マダレナ/バブ・リーナ
(以上UPPER CAMP)/体育 CUTS/
UNIT BATH/Edo 8s/Yosuke/親式/
The Wind Ensemble/スキンエコー/
ペーすけ

ぶれいす東京トークショー:
長谷川博史&春日亮二&生島嗣



出演者全員が壇上にあがって
フィナーレ



「POSITIVE VOICES
20人のHIV陽性者の
声」HIV陽性者の手記
集第2弾

■ VOICE2002 Living Together, Loving Others



2002年12月14日(土) 18:00～
於：四谷区民ホール

出演：てるこ&けんけん／NAOYUKI／
GOLDEN ROSE／Ab&HGM (Hyper Go
Mens)／The Wind Ensemble／
スキンエコー／ペーすけ

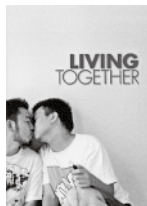
オリジナルビデオ：「ペーすけの部屋」



初代コンドームケース



ビデオ「ペーすけの部屋」(2組
のHIV+とHIV-のカップル)



「LIVING TOGETHER」
17人のHIV陽性者の声
とQ&A集
(写真：竹之内祐幸
デザイン：松浦佳弘)

■ VOICE03 anniversary



2003年11月29日(土) 18:00～
於：四谷区民ホール

出演：エスラルダ with 牛子、L、
マダム＝ラ・フランス、アニー・ブイヨン、
Lalamiria／親式／NOBBY／
ディベルティメント／スキンエコー／
ペーすけ

ビデオ：「Love for LIFE～僕たちの記念
日」



ドラマ仕立てのビデオ
「Love for LIFE～僕たちの記念
日」のラストシーン



冊子「LIVING
TOGETHER～
manual」
(写真：田口弘樹 デザ
イン：松浦佳弘)

■ VOICE04



2004年11月27日(土) 18:00～
於：四谷区民ホール

出演：バビ江ノビッチ&ミッツ・マンガ
ローブ&メイリー・ムー／ブルボンヌ／
おわっとう／YASUMASA／
ディベルティメント／スキンエコー／
エスラルダ／ペーすけ

ぶれいす東京ビデオ：「POSITIVE
VOICES」(7人のHIV陽性者と一人のパー
トナー)



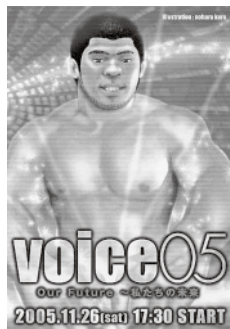
Living Togetherのロゴ入り
コンドームケース



冊子「LIVING
TOGETHER
LETTERS」12人
のHIV陽性者、パー
トナー等からの手
紙(写真：田口弘樹
デザイン：MMK
graphic)

■ VOICE05 Our Future

～私たちの未来～



2005年11月26日(土) 17:30～
於：四谷区民ホール

出演：エスラルダ／
オナン・スベルマーメイド／
肉襦袢ゲブ美／肉乃小路ニクヨ／
ブルボンヌ／マルガリータ／
NONOCHIC／ペーすけ／藤本大祐／
ディベルティメント／スキンエコー

オリジナルビデオ：「living together」
(featuring JILL from PERSONZ)



NONOCHIC とドラッグク
イーンのコラボレーション

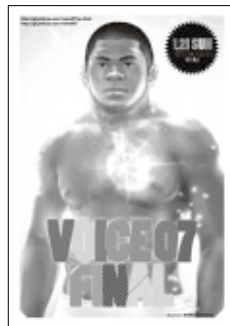


冊子「OUR DAYS」20代/
30代/40代の3人のHIV陽
性者のPositive Diary
(写真：kit／磯山龍朋／
ないつん
デザイン：MMK graphic)



ビデオ「living together」より
PERSONZ JILLさんのインタビュー
シーン

■ VOICE07 FINAL Together Again



2007年1月21日(日) 17:30～
詳しくはP5～7をご覧ください。

* VOICE2001は、協賛:LIVIS、2002-03
は後援:(財)エイズ予防財団、2004-07は、
主催:ぶれいす東京/(財)エイズ予防財
団で開催されました。

◆それぞれのVOICE10年◆

それぞれのVOICEへの想いや、HIV/AIDSを身近に感じ
たときについて書いていただきました。VOICE 07 Final公
式プログラムに掲載したものからの転載(長谷川さん、だだ
さん、伏見さん、G.O.Revolutionさん、砂川さん、スキ
ンエコーのメンバーの方)と、Rさんの書き下ろしのコメント
です。

10年前、僕はゲイ雑誌の編集者をしていました。いっぽうで
新宿2丁目をゲイ・コミュニティと表現することに違和感
を抱いていました。しかし、そうあって欲しいと言う願いから
誌面では可能な限りコミュニティという言葉を使っていた。
ゲイが同じ問題を共有して繋がらない限り予防は成功しない
と感じていたからだ。

そんなある日、ぶれいす東京が主催する「お楽しみ演芸
会」というなんともベタな名前のイベントの取材に出かけ

た。これが VOICE の前身だ。

校了間際に時間がなく、小さな記事を書けるだけの取材をしたら早々に引き上げるつもりでいた。しかし見ているうちに目頭が熱くなり、気がつくやうに涙が止まらなくなっていた。僕たちは同じゲイとしてこの街で確かに繋がっている。そう感じていた。

これ以降、全国でコミュニティ活性化型の HIV / エイズ予防啓発の手法が定着していく、そして実際に僕たちのコミュニティは本物のコミュニティとなるべく動き出した。今は、新宿 2 丁目が僕たちのコミュニティであることは間違いない。

その重要な役割を果たし、VOICE が一区切りをつける。これまでこのイベントに関わったすべてのみなさん、ほんとうにお疲れさまでした。そして、ありがとう。(長谷川 博史)

10 年前、初めて検査を受けました。結果を待つ間の恐怖感。試験のときも、初めてセックスをしたときも、あれほど緊張した記憶は無く、自分のなかの無知や偏見にも気づいた瞬間でした。

それから……予防と啓発に関わる多くの友達と出会い、有名無名の感染者の方々と出会い、オーケストラの仲間に出会い、VOICE に出会いました。10 年前に感じたり考えたりしなければ、きょう楽器を手にこの舞台に立っていることも無かったかもしれません。

その VOICE も、10 回目を迎えひとまず幕をおろすことになりました。スタッフ・出演者の皆さま、本当にお疲れさまでした。イベントという形は無くなっても、ともに生きていく (living together) ことができればうれしいです。

(divertimento だだ)

感染者の友人がいなくても、HIV の情報に接する機会も多いのに、エイズ / HIV にリアリティを感じる機会はない。やはり病気は自分自身に直接関わってこないとなかなか実感できないものだ。けれど、VOICE のステージ上で上映される啓発ビデオには、迫力を持って自分に問いかけてくる何かを感じた。そんな貴重な一瞬を感染者や非感染者の友人たちと共有できたことに、心より感謝申し上げます。長い間、イベントを作り上げてきたスタッフのみなさん、ご苦労様でした。(作家・伏見恵明)

いちばん最初のショックはフレディ・マーキュリー。それからダムタイプの古橋悌二さん。偉大な先輩の死によって、エイズが大きな事として僕の中に刻みつけられました。

97 年に「VOICE」の前身である「お楽しみ演芸会」に出演した際(当時は女装でした)、古橋さん扮するミス・グローリアスへのオマージュを捧げました。

それから長谷川さんとの出会いがありました。僕が映画祭で担当したエイズについての短編を「最低です」と非難した長谷川さんの真意は「もう HIV は死に至る病ではない」という宣言でした。

それから少しずつ、周りで HIV+ だって教えてくれる人が増えていきました。今は、二丁目に出ても、ゲイナイトでも、飲み会でも、HIV+ な友達といっしょにしゃべったり飲んだり抱き合ったりってのが当たり前になっています。

中にはエイズを発症してしまって大変な友達もいて、できるだけの気遣いはしています。でも、ほとんどの友達は僕なんかよりよっぽど元気で、つつい HIV のことなんて忘れてしまうくらい(笑)

これからもそんな友達と、たくさんのステキな時間を共有していきたいと思っています。(G.O.Revolution)

このイベントを発案したときには、これほどまで多くの人に愛されるイベントになるとは予想していませんでした。当時の「ゲイ・コミュニティ」の HIV/AIDS に対する関心は、今からは考えられないくらい低いものでした。その頃に比べると、男性同性間の HIV 感染の問題に関わる人も、その活

動に投入される資金も格段に増えました。関心もずいぶん高まり、広がりました。しかし、まだまだ足りないものがたくさんあります。VOICE がなくなった後、ぶれいす東京がどのような活動を展開するのか楽しみです。このメッセージを書くにあたって、「HIV/AIDS を身近なものと感じるとき」というお題をいただきましたが、このお題には、「Living Together (ともに生きている)」というスローガンとのギャップを感じました。HIV/AIDS は、HIV に感染していても感染していなくても、もう全ての人の「中に」様々な形で入り込んでいる問題であって、「身近」という「外に」ある問題ではないと僕は考えています。「Living Together」という言葉の意味を深め広げるために、自分には何ができるのか模索していきたいと思います。(砂川秀樹)

この数年の間に、なんと多くの HIV キャリアーの知り合いが出来たことだろう。友達から突然のカムアウトもあれば、キャリアーと知った上での出会いも。

しかし、顔を合わせながら話しが出来たり、相談の出来る「ぶれいす東京」という安心する場所がなかったら、彼らも、カムアウトしなかったかもしれないし、僕も聞く準備が出来なかったかもしれない。共存する、という素晴らしさを教えてくれたぶれいす東京に、感謝。(スキンエコー メンバー)

もしかしたら、私がアフリカ系アメリカ人で、人種による差別や偏見が普通に存在する環境で育ったからかもしれませんが、コミュニティの他のメンバーと協力して、そのコミュニティ全体で抱える社会的・個人的な問題に取り組むことの重要性和、それを行うことの喜び・満足感を知っています。

今や年次恒例行事である「VOICE」の原型となったイベントに 10 年前に携わった際、自分たちのために自分たちの手で、ゲイコミュニティにとって意義と価値のあるものを作り上げようと、時間、労力、才能、知識を惜しみなく費やしてくださった多くのゲイの方たちと一緒に仕事をすることは、HIV 陽性の同性愛者として非常に喜ばしく、また感銘を深く受け、感謝の気持ちで満たされる経験でした。アフリカには子育てに関して、「It takes a village. (村全体の力が必要である)」という諺があります。これは、1、2 人の力だけでは充分ではなく、献身的な人の集まりがそれぞれできる方法で力を出し合って協力すること(人は皆それぞれが違っているので、その貢献の仕方は各々異なる)が必要であるということを表しています。

そのように皆で力を合わせ、このイベントの立ち上げに取り組み始めたのが去る 10 年前。グラフィックアーティストたちはフライヤーを作成し、ミュージシャン、ボーカリスト、ドラッグクイーンなど才能豊かな演者たちは人々を楽しませると同時に啓発するようなショーを仕上げるためにリハーサルを行い、バンを持っている人たちは機材の運送を助け、多くの心優しい人たちが自分の時間を犠牲にしてフライヤーを配り、大道具の設置・移動を手伝い、チケットを切り、プログラムを配布し、プロジェクターの設置・操作を行い、備品の買い物を行い、その他、イベントの構想段階から公演実施までの様々な段階において、コミュニティのメンバーそして観客の皆さんと共有するための数多くの作業をこなしてくれました。ゲイのアーティスト、技術者、デザイナー、スタッフ、ボランティアの皆さん、そして観客の全員で、1 人だけの力ではできないような力強いイベントを、自分たちの手で自分たちのために作りあげました。

10 年後の今となっても、私の友人も含め大勢の方たちが、コミュニティの様々な才能豊かな参加者によって提供されるこの素晴らしいショーを楽しみにしていることを、私は知っています。職業上も演劇業界に身を置く者として、10 年間というのは誇りに持ってよい公演期間だと言えます。「VOICE」に取って代わるイベントとしてぶれいす東京が現在企画している新しいイベントも、同じように人々に感動を与え、励まし、愛されるものになることを私は確信しています。(By R.)

VOICE 07 Final—Together Again—

ゲイバイセクシュアル男性向けHIV予防啓発イベントとして毎年行われていたVOICEが、10年をひと区切りとすることになり、「VOICE07 Final—Together Again—」が開催されました。2007年1月21日に四谷区民ホールにて、来場者394名、出演者90名、スタッフ30名の一大イベントとして最終回を迎え終了しました。

「VOICE 07～当日の様子」

sakura

本番当日、開演の2時間以上前からホールの前にはお客様の姿がありました。どうしようかと思いつつ、スタッフは皆少しほっとしていたのではないかと思います。例年と異なる1

月末という時期、しかも日曜日の夜の開催とあって集客面は不安があったのです。しかし最終的には400名近いお客様にご来場いただきました。

今回のプログラムはdivertimentoの皆さんの弦楽で始まります。オペラの第一幕への前奏曲的な位置づけで、続くベーすけさんとエスムラルダさんの登場の場面からは、お二人がピアノバーのママとピアニストに扮し、「Bar エスム」を舞台上に様々なショーが展開されるという趣向でした。

マルガリータさんのショーではお客様との絡みでハプニングがあったのが逆に大受け。ご本人は困惑気味でしたが…G.O.Revolutionさんの登場からはクイーン関連の演目が並びます。いよいよHIV/AIDSに関わる話を展開する、というパートでしたが、バーでのトークに続くG.O.さんのショーもNONOCHICの皆さんのダンスも安定感があって素晴らしいものでした。NONOCHICの皆さんがレッドリボンを使ったパフォーマンスを組み入れてくださったのはお客様にもかなりインパクトがあったようです。さらに休憩をはさんで登場のスキエンコーの皆さんにもクイーンの曲を含む演奏を披露していただきました。前半と後半がつながって、一つの流れが途切れずにエスムラルダさんのショー、さらにバーでのリーディングへ続きます。リーディングは我らが池上代表、今回音響スタッフとしてもご協力いただいたしんやさん、そして長谷川博史さんをお願いしました。手記リーディングはスタッフ側では他のイベントでも行われている「よく知られた手法」的な捉え方でしたが、VOICEは客層が違うのか、初めてリーディングに触れて感



今年のVOICEはdivertimentoの弦楽演奏で幕開け



ピクニック?にでかけるマルガリータさん



G.O.RevolutionさんはQueenのフレディ・マーキュリーで登場

動した、という声をアンケートでたくさん頂戴しました。リーディングの後にはメロウディアスさんのLiving Togetherのフラッグを使ったショーで、メッセージ性の強いパートを見事に締めくくっていただきました。そして前回も好評だったコラボレーションによるショーは、ミュージカル「RENT」の中の曲を使っの全出演者によるコラボレーションが実現しました。出演者の皆さんには前日に自主的に合同練習していただくなど大きな負担をお願いしましたが、鳴り止まない拍手が全てを物語っていました。

たくさんの方に支えられてFINALに相応しい素敵なイベントを作ることができました。ご協力いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。



司会はおなじみベーすけさんとエスムラルダさんの二人



後半はスキエンコーのコーラスから

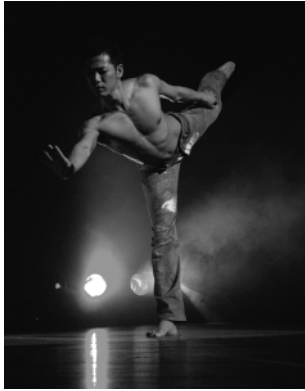
■来場者アンケートより

当日アンケートでいただいたご感想・メッセージをごく一部ではありますがご紹介します。

- ・今回初めての参加でしたが来てよかった。HIVについてもっと真剣に考えようと思いました。
- ・楽しむだけの軽い気持ちで来たのですが思いの外感動しました。笑い、涙、会場が一体になる感じ、すごく良かったです。
- ・ぶれいす東京などボランティア団体の名前は知っていましたが今回初めて顔が見えた気がしました。少し身近になった気がします。
- ・HIVは一つの形。人生、共にあることが素晴らしいことなんだ、という思いを新たにしました。
- ・初めて来たのは99年だったと思います。デビューしたてだった自分にとって、「ゲイってこんなにいるんだ」「みんな、楽しく元気に生きてるんだ」ということを知ったのをおもいだしました。HIVの元彼はいまでも元気に生きていて、うれしく思う一方、いつまで生きてくれるか不安になることもあります。でも来年もまた何らかの形でこうした集いができて、HIVを考えることができたと思います。スタッフ/出演の皆さんお疲れ様でした。

来年以降もイベントの継続、あるいは別の形でのイベント開催を望む声を数多く頂戴しました。またリーディングに初

めて触れたという方がその衝撃や感動を記入してくださったものもたくさんあったのも印象的でした。



NONOCHIC のソロパート



NONOCHIC の群舞

■参加者の感想文

「最初で最後の VOICE」

K.I.

今回のVOICEは、僕にとってまさにすべり込みセーフだった。ギリギリの時間まで、ホットラインの活動をしていただけではない。10回目にしていっただんのおわりを迎えるVOICEに、ギリギリ間にあって、初めて参加することができたからだ。

VOICE は生まれて初めて参加した、ゲイ向けのイベントでもある。僕はこれまで自分のセクシュアリティについて周囲にほとんどオープンにしてこなかったし、イベントにも行くことはなかった。今回、ぶれいすのイベントということで、「ぶれいすスタッフの一員として行くだ」と自分を納得させる気持ちと、「これを逃したら、当分参加できるイベントはない」とあせる気持ちでいっぱいだった。

だからだろうか、会場に入った当初、新人研修でお世話になったスタッフの方が横を通るのも気づかないくらい、人目を気にして緊張していた。はじっここの席に座って、やっと少し落ち着いた。

それでも演目が始まると、今まで文字の上でだけで知っていたドラッグクイーンたちのパフォーマンスを初めて生で見て、「これだったのかぁ」と感慨に耽った。また、リーディングは印象的で、とくにしんやさんの読んだ最愛のパートナーに向けて書かれた手記には、僕にはそんな経験はないのに、聞いているだけで涙が出るくらい引き込まれた。

気づくといつの間にかRENTのテーマをコーラスにあわ



パートナーに向けた手記をリーディングをするしんやさん

せて口ずさむほど、リラックスしていた。そして、勇気づけられていた。

ある人がVOICEのもつ力について、「自分のもつ弱さが、人の役に立つかもしれない



リーディングをする池上代表

リーディングをする池上代表
と思える経験だ」と言っていた。本当にそうだと思う。今僕は、自分の今までの生き方を見つめ直し、時間はかかるかもしれないけれど、肯定するために少しずつ動き出そうと思える。VOICEでの経験が、一歩踏み出すのを後押ししてくれるものとなった。こういった場を準備してくださったスタッフや出演者の方々、本当にありがとうございました。

「ポジティブなバイブに包まれて」

コウタ

『VOICE 07 FINAL』私にとってはどのようなイベントか正直分からなく、ただHIV/AIDSのことをもっとよく知りたい、という想いから行ってみようと思っていました。当日はストレートの友達数人と遊んでいましたが、四谷区民ホールへは一人で向かいました。結構時間も余裕をもって向かったつもりでしたが、9Fの会場へ行くと大勢の行列ができていて『VOICE』を知らなかった私には、まさかこんなに沢山の人が集まるとはと圧倒されてしまいました。ちょうど私の前で入場制限がかかり「もしかしてはいれないのでは？」と思うくらいでした。しばし待ち、席に着いた時はホッとしました。周りは結構友達同士等で、一人で来ていた私は少し緊張しました。しかしイベントが始まりオーケストラの演奏に魅了されバー『エスム』が開店されトークが始まると、おもわず笑い、笑いの連続でショーにすっかりとはまっていました。Queenのミュージカルになるとまるで出演者の汗がこちらにふきかかってくるような感覚におちいり、一生懸命格好良く踊る姿とレッドリボンが星の形に奇麗にきまるシーンなどとても感動しました。その後またトークで笑い、そして長谷川さんが明るくHIVポジティブとカミングアウトされている姿はとても素敵に生きているように感じました。そしてフィナーレとなりRENTよりSeasons of Love…この曲がかかると思わず感極まり涙がポロポロ。もう言葉では表せないほどでした。How about



長谷川さんのリーディングに会場のあちこちで涙

love? How about love?と一緒に口ずさみあたまの中で自分自身に問いかけて…とにかく感動しました。

とにかくこんなに大勢の人が関心をもっており、すごくポジティブなバイブに包まれていてHIVが別に特別なものでもなくLiving Togetherってこういうことなんだと痛感しました。しかし私には目に鱗で、VOICEが私にとって最初で最後となりましたが今までこんなイベントが行われていたのに無知な自分自身の視野の狭さも感じました。出演者の方、スタッフの方、本当に感動をありがとうと伝えたいです。終わってから感動を押さえきれず、HIVのパートナーに

電話し伝えました。「あ～そうか、一緒に行けば良かったな…」と本当に一緒に行けば良かったなと思いました。

『VOICE』 FINAL ～そして NEXT GENERATION

おやかた（2001年-2005年のVOICEにボランティアとして参加）

毎年冬の定番イベントになっている『VOICE』が、今回で記念すべき第10回ということで『VOICE'07 FINAL～Together Again』と題して、四谷区民ホールにて開催されました。

今年は諸事情により～いつもの年末12月より、1月に引っ越しした『VOICE』ですが、そのタイトル通り～今回をもって最終回となりました。Bar エスムにて最終回ということで今回は装いも新たに、ステージ上になんと！一軒のゲイバー～その名も"Bar エスム"が登場！今回ショウとショウの間をつないでいくのが"barのママ"エスムラルダ&"barのピアノ弾き"ペーすけさん。お二人とももうすっかり『VOICE』には欠かせない存在となっています。

今までの『VOICE』は一つひとつのショウが独立した構成で、ショウの幕間を総司会会のペーすけ&エスムラルダのお二人が絶妙なトークでつないでいくのですが、今回はダンス～DQ～そして音楽がQueenの曲やミュージカルのRENTを介してリンク？してました。やや途中展開に時間が気になる部分もありましたが、ミュージカルのようにつながったひとつの舞台を見ているようで、これは新しい展開でした！こういう見せ方もあったんですね、面白かったです。

実際に見るとやはりショウそれぞれのクオリティが高いとあらためて実感。印象に残ったのは「NONOCHIC」のダンス！と、言いたいですが、やはりいちばんは「長谷川博史」のリーディング"しゃぼん玉"でした。他の方のリーディングももちろん良かったのですが、元祖には勝てませんね…思わず途中で…(T-T)

今回初めて観客として『VOICE』を見ましたが、やっぱり"面白いそして凄い"イベントだとただ単純に感じました。こんなイベントに今まで裏方としてでも関わったことは、自分にとっても重要な時間だったと思います。

今年で『VOICE』は最後になってしまいました。10年前～HIV/AIDS啓蒙活動イベントもまだまだ盛んではなかった時代に『VOICE』は始まりました。今では関東以外でも札幌・大阪・名古屋など各地方でもHIV/AIDSに関する大きなイベントが開催されるようになり、HIV/AIDS以外にも東京ではパレードの継続的開催やレインボー祭りも定番イベントとなっています。そんな時代も変わってゆく中『VOICE』もちょうど10年で～ひとつ区切りを迎えたようにも思います。

『VOICE』は今回でひとつ区切りですが、また新たなスタートを期待したいと思います！



Bar エスムにて



ミュージカル「RENT」より "Seasons of Love"



「We're already living together」と書かれたフラッグを振ってパフォーマンスするメロウディアスさん

■スタッフからのサンキューレター

出演者のみなさま

ステージまわりのみなさま

“VOICE” に尽力いただいたみなさま

本当にありがとうございました。

調整役を承りました僕が、人見知りで、何事も待ちのスタンスで、そのうえ夢見がち、そんな性格でしたので、いろいろと迷惑をおかけしたと思います。

でも、旅は道連れ、世は情け。いろいろと助けていただき、そして、みなさんの力が合わさって、最高の形で幕を降ろすことができました。

感謝、感激です。

本番は、スタッフでありながら、いち観客になって、目眩くショーを見ながら、何度もジーンと目蓋のあたりを震わせておりました。

いやほんとに、これをこの日だけしか見られないのはもったいない…、この一座で日本中を、世界中を公演してまわって、たくさんの人に見てもらえたら素晴らしいだろうなあって、夢が飛躍するほどでした。

アンケートで、お客さんの反応を読んでみましたら、やはり目頭を熱くした方が、たくさんいらっしまったようですよ！

嘘ではなく、ネガティブな反応は皆無でした。

昨夜は、きっとあの場所にいたみんなが、大なり小なり、何かいいものを持ち帰ることができたのではと想像しています。

“VOICE”は幕を降ろしましたが、お祭りのない人生なんて…

新しい形で、バージョンアップして、また再会できるときを今から心待ちにしています！！



(漏見) フィナーレそして幕が引かれました

難しさと向かうこと (08)

HIV/AIDSの分野で日本企業が社会貢献をするようになるには、何が必要なのでしょう。いち担当者の発案が企業に定着していく過程と、その背景にある個人的なバックグラウンドなどを含めて、サンスター株式会社広報室の吉田智子さんにお話を伺いました。

★聞き手：生島 嗣

企業の社会貢献と HIV

～いち担当者の発案から企業としての活動へ～

★最初に個人的なことをお聞きしたいのですが、吉田さんが HIV/AIDS に興味を持つようになったそもそものきっかけは何ですか？

大学のときに国際関係学を勉強していました。国際関係学って、国際政治とか経済とかあらゆる分野をやるし、先進国の問題だったり途上国の問題だったり、アメリカについてやってみたり、アフリカだったり、ヨーロッパだったりして、どのアプローチもおもしろい。けれども、それを繋ぐもの、自分の中で響くものがないな～と思いながら勉強していたときに、97年なんですけど、ニューヨークで「RENT」っていうミュージカルを見たんです。昔から舞台をやっていたので、このミュージカル自体にすごくインパクトを受けました。でもお話が英語だったからよく分からなくて、どんなストーリーなのか調べたらエイズっていうテーマが出てきたんです。エイズってそう言えば高校生のときに学校でやったけど何だったかって。なんでそれがこんなにインパクトあるミュージカルになってアート作品になっているんだろうって。

そのエイズっていうのを調べいろいろ始めたら、アクトアップの運動のことを知ったんです。社会運動としてのエイズというのを知って、ちょうど卒論を書く時期だったし、これはアートも入るし、政治も社会も経済も関わってくるし、自分が女性としてどういうふうに生きていくのかとか、自分自身の生きにくさの問題ともからみあっている。これは自分に響くなと思って。社会運動としてのエイズというものを通じて、生きやすい世界はどんなものかとか、自分らしく生きるというのはどんなことかということを考えたいなと思って勉強し始めました。

★アメリカに留学されていたということでしたが、HIVについて勉強していたんですか？

以前からアメリカに留学したいという漠然とした思いがあったので、じゃあ保健教育をやろうと思って、ニューヨーク大学の教育学部の大学院で国際地域保健教育という分野で2年間勉強しました。ビレッジのど真ん中にある学校に行っていたんですよ。コミュニティの中でどういうプログラムをしたらいいのかアセスメントをして、プログラムを作り、実施して、モニタリングして、エバリュエーション（評価）するっていう、そのプロセスを基本的には勉強するんです。そこで、わたしは何か課題があるたびにエイズのことをやっていた、APICHA（アメリカ在住のアジア系の人々にエイズ関係のサポートをする非営利団体）でボランティアしたりとか、現地でアクトアップのミーティングに出たり、デモとかもやりましたよ。なので、ニューヨークでの生活は基本的にエイズを中心に回ってました。

★ニューヨークで生活している中で感じたことは何ですか？

アジア人のコミュニティって、ニューヨークにいてもエイズに関する意識が薄いんです。APICHAに関わっていると、だからこそすごく一生懸命広告うってたりするのが見えるんですけど、日本人のコミュニティの中とか、韓国人の友達と話したりすると、エイズっていう

のはもう見えない、語られない、関係ないという感じでした。たぶんニューヨークにいと余計にアジア人がアジア的な感じとして内面化している部分があるんじゃないですかね。自分たちはセクシュアルにアクティブ



吉田智子さん

じゃないとか、白人や黒人にくらべるとそういう病気にかかるような文化風習を持っていないとか……。そう思われていること自体が自分たちの問題だっている人もいるんだけど、実際にエイズは関係ないという理屈がコミュニティの中でもできあがっているし、その中で意識を変えていくのが難しいという悪循環がアジア人のコミュニティの中にはあるなって感じていました。

★学生生活で感じたことは？

国民皆保険じゃないじゃないですかアメリカって。だから、大学では、保健センターがすごいしっかりしていて、そこに行けばサービスが受けられるという、ある意味特権みたいな部分がありました。あそこに行くと、性教育に関するパンフレットがものすごい大量に置いてあるんです。たとえば梅毒だったら、パンフレットが1種類や2種類じゃなくて、10種類とか置いてあるんですよ。ターゲットも違うし、人種も違うし、性別も違うし、セクシュアリティも違う。だから、あらゆる種類のNPOとかのパンフレットがだ一つとならんでいる。自分の好きなものを取っていくことができ、そういうのを見るとやっぱり身近な問題なんだなって、少なくとも情報発信はされているんですよね。学内のカフェテリアでも保健センターが出している情報誌が置いてあって、性教育の問題だったり、デイトレイプの問題が載っています。大学に入ったときに一番最初に学内のハラスメントの問題についてのパンフレットをもらいました。学校にとってはリスクマネジメントでもあって、そういう情報をちゃんと出すし、学生の方もどこに行けば情報が手に入るのかわかるようになっていました。

★日本でも学生生活をした経験があると思いますがかなり違いますか？

違いますね。いかに自分たちが教育されてこなかったかということを痛感します。たぶん教育されてくれば、自分たちだって知るわけだし、そういうことを知っていいんだって思えば、もっと情報が欲しいとか、とりに行く場所を探したりする可能性があるんだけど、まったくそういうものがない。今までなかったんだってものすごく感じました。

★振り返ってみて、アメリカでの学生生活でもっとも印象に残ったことは何ですか？

やっぱり、ハームリダクションという考え方に出会ったっていうのは、私の中ではすごく大きかったです。ハームリダクションは、もともとは薬物を使う人たちが、薬物を使うことの善悪を問われるのではなくて、薬物にまつわる健康被害を少しでも減らせる方向にサービスを提供しようという考え方です。そういった考え方に基づいたセッションや、レクチャーシリーズ、セミナーみた

いなのがあって、それを選んで受講が出来るんです。薬物もそうだし、セックスも一緒だと思うんですけどね、セックスをするかしないかという善悪を問うのではなくて、するんだったらより安全に。安全っていうのはその人にとって何がどういうふうに安全なのかということです。その人が必要としているものに対して、何が提供されていればその人が求める生き方の中でより良い方向が見出せるのかというアプローチの仕方を、そこで学ぶました。これが、わたしに保健教育のビジョンみたいなものを与えてくれたんです。これだ！っていう感じですよ。

健康というものの定義がすごく難しいなと思いますね。健康に良いことすべてをして、健康に悪いことを一切しなければいいのか。もちろんそんな環境には置かれなくし、その人にとっての幸せってすごく多様で、その中で何を選ぶかということですよ。なのに保健教育ってちょっと原理主義的なイメージがあるなって思ってたんです。でも、そうじゃなくていいんだよっていう答えを得たような気がしました。

★帰国後のことをお話しいただけますか。

社会人としてやっていく基礎を身につけるには、日本では会社に入るのがたぶん手取り早いと思ったんです。あと、社会の先生の免許を持っていて、将来教員になることをちょっとそのころ考えていたので、教員になるんだったら、社会のことを知っているのは良いアイディアじゃないかなとも思っていました。

わたしがエイズに関する仕事をしたいと思っていても、日本でどんなふうにやればいいのかかわからないし、日本でエイズをやる前にアメリカに来ちゃったから、日本の状況も分からないっていうものもありました。自分も親から独立して食べていきたいっていうものもあったし、まずは仕事に就くことを優先に考えましたね。

★なぜ、サンスターに決めたのですか？

サンスターの社是には「常に人々の健康の増進と生活文化の向上に奉仕する」というのがあって、経営理念に共感した部分もありました。それから、私は千葉出身で中高大と東京で過ごしたんですが、サンスターは大阪に本社があるんです。自分が今まで暮らしたことがない日本で暮らしたかったんですよ。アメリカに行って日本のことを聞かされても、自分が知っていることはすごい限られていていう限界を感じていて、どこか違う土地で違う人と会って違う文化に触れて、日本の中の多様性っていうのをもっと自分の中で吸収したいっていうのがありました。「大阪本社勤務ですけど、いいですか？」って言われて、それがすごくわたしの中では大きかったんです。

★仕事をするっていうのは、企業という組織の中でのある役割を果たすという部分があると思いますが、やりたいと思っているのはHIVだったわけですよね？

わたしはエイズに関しておもに若者と薬物のことを勉強していたので、あまり職場とエイズっていうのは考えたことがなかったんです。ただ、企業の役割があることを頭では分かっていたので、何かできることがあるといいなと思いつつも、最初はあんまり会社を巻き込むことを意識していなかったんです。自分は自分で活動するけどそれは個人的なことと考えていました。

★サンスターに入社して、どこに配属されてどんな仕事をしていたんですか？

最初からずっと今まで広報室なんです。最初2年半が大阪で、その後は東京勤務です。大阪はニューヨークよりずっと異文化でした(笑)。何が違うのかな？どのへんかなー？例えば「上司につっこめ」って言われるんですよ。上司がばけてそれに気づかないと、「つっこんであげな」って言われるんです。でも、つっこみ方を間違える

と失礼なんですよ(笑)。それに、やっぱり食べ物に対する感性も違いますね。味付けとかも全然ちがうし、金銭感覚が違いますよね。安いものが自慢になるとというのが関西らしい。

★日本の多様性を初めて知ったわけですね。

ほんとに知らなかったことに気がつきました。自分の立つ場所が変わると、見える日本地図が変わりますよね。たとえば、大阪にいて福井とか四国とかの位置関係と、東京にいて見る位置関係は違いますよね。人の流れも、大阪にはどういう人が集まるのかとか実感としてわかるような面があります。留学中にインターンシップでカンボジアに行っていたときにも同じようなことを思いました。カンボジアに立って見る東南アジアの地図、たとえばマレーシアとの位置関係とか、やっぱり日本にいて見るのと違うじゃないですか。それはおもしろさだなと思います。

★きょうここに来て驚いたのですが、会社の玄関にレッドリボンがあんな大きく置いてある会社なんて日本ではまず聞いたことがありません。そこまでに至るプロセスをお話しいただけますか。

一番最初にエイズの活動をしたのが2005年の神戸ICAAPにブースを出したときなんです。そのころは社内で社会貢献活動に対しての見直しの時期でした。サンスターは、歯科・オーラルケア関係以外の社会貢献活動は、社外からいただいた話に乗るという形ばかりだったんです。たとえばこういう寄付の話があって、これをぜひ皆さんで連名で広告出して難病の子供たちを救いましょうといった感じです。でも、うちの魂とかね、ビジョンとか無いがないんですよ。サンスターとしてどうしてもこれがやりたいんだとか、この問題に貢献したいという本来の社会貢献とはちょっと違うよねという話になりました。



神戸ICAAPのサンスターのブース

社員も参加したいと思ってくれる社会貢献活動で、しかも続けられるもの。社内でも盛り上がって一体感が増して、経営理念がさらに強まる、そんなテーマはないかということになったんです。それで、わたしはNGOとか社会問題に関心もあるし、エイズのことだったら自分自身がリソースをもっているし、会社に対してリスクにならないように、しかも問題に対して貢献できるような提案ができると思うんですけども、そういうことを提案するチャンスはありませんかっていうことを上司に話したら、ぜひ準備してみてくださいということになりました。

★吉田さん個人としてはすごく興味があって揺るぎのない想いがあったと思うんですけども、企業の中でそれを提案するっていうのは、いろいろな反応を予測したりするわけですが、その時には迷いとかあったんですか？

躊躇のようなものがありましたね。個人的興味を会社を持ち込んでいるという気後れみたいなものもあるし、もう一つはうちの会社で何故エイズなんだっていう繋がりを説明しにくい。たとえば抗HIV薬を作っている製薬メーカーだったり、検査キットを作っていますというのではないですから、問われたら難しい問題だなというのが自分の中にありました。

個人的な気後れは置いておくとして、何故エイズなのかというのは、うちの社是にある「常に人々の健康の増進と生活文化の向上に奉仕する」に合致している健康の問題だということと、グローバルにいま世界で最大の保健問題であるということですね。自分たちがビジネスを

しているどのエリアにも影響が大きい問題だということです。それから、うちは社員を守るってことをすごく意識していると経営者が言っている会社なので、社員の健康問題としても重要であるといったことを上司にプレゼンテーションしました。そうしたら部内での検討を経て、経営陣に話があげたんです。

★経営陣の反応はどうでしたか？

サンスターは日本での売上が大きい会社なので、日本でHIVという問題があまりポジティブに捉えられていない今の現状の中ではどうなんだろうというネガティブな意見もありました。でも、これは問題が大きいので、やるんだったら真剣に取り組みなさいとも言われました。それだったら神戸ICAAPっていうすごく価値のある国際会議があるので、これにまず出展する、あるいは社員がボランティアで参加するという形で、その第一歩を踏み出すということを提案しました。ある程度長期的なビジョンを持って取り組むための、まず最初のテストケースとして、ICAAPに参加するということになったんです。

★経営陣から出た意見に対して、広報室はその後どのように対応したのでしょうか？

ICAAP自体がテストケースだったので、それがどういう風な意味があったかをちゃんと社内で報告しました。ICAAPに参加してボランティアをする、ブースを出すといったことを通して、企業として取り組みを一步進めたということを社内に広報したり、ICAAP後の、たとえばエイズ&ソサエティ研究会議に講演に呼ばれたりしたのも、ある意味で評価していただいたということなので、それをまた社内に報告したりとか、けっこう丁寧にやりました。それと、ICAAPのあとに社内でも社外でも、ネガティブなリアクションというものもどこにもなかったんですよ。たとえばICAAPに出てみて、サンスターはエイズなんかやってとか、なんか悪いことだみたいな、それがどこからか聞こえてくるようなことが一切なかったんです。それで、経営陣としても、大丈夫なんだね、っていう反応だったと思うんです。

★社会貢献というと社外に向けた活動だと思われがちですが、サンスターでは社内もかなり意識していますね？

うちのグループの方針としては、社内を巻き込む。できるだけ社内に情報も出し、社員の人にもエイズを理解してもらって、活動としても理解してもらう。具体的にICAAPに関しては、行く前にレッドリボンをみんなに作ってもらってというのをやりました。この部屋でも、あの部屋でもやったし、あのあたりでも(笑)。リボンを切ってまとめているのを本社でもやって、課長が一日かかりきりでリボン切ったりする日もあったし、そういう形でプロセスに社員を巻き込むということをしました。

あと、会社では情報の共有や経営方針の徹底をする必要があるのもともとイントラ（社内情報網）がすごく発達していますよね。ICAAPのあと、社内報やイントラネットで、「こんな風に意味がありました」「こんな風に喜ばれました」とか、ちょっとグローバルな感じでいろいろな国の人の写真とイラストに載せると、うちの会社がエイズのことをやって喜ばれたんだということが伝わるんです。それから、報告をするときにエイズの現状を紹介して、また知識を補充するといったことの繰り返しです。

うちの場合はわりと経営者が企業活動は社会活動であるという意識が強いんです。だから社員が第一のステークホルダー（利害関係者）だという意識がすごく強いです。エイズのことをやるのに社内のこともやるのは当たり前ですよというの、なんとなくすーっと社内に受け入れられているような気がします。だからと言って、みんなが真剣に時間かけて取り組まかっている、みんな忙しいからまた別問題なんですけどね。

★社員の多くが今回初めてHIVのことにかかわり、いろいろな反応もあったのではないかなと思うんですが。

一番最初の段階で、社内ですごく簡単なアンケートをとりました。60人くらいだったかな。一応年代はばらけさせて、男女も半々で、長いと答えてもらえないので3、4問くらいです。「エイズは身近な問題だと思うか」「エイズに対するイメージ」「会社がこれをするのをどう思うか」「基礎知識」を聞きました。そうしたら、会社の社会貢献としても、自分の問題としても身近じゃないという人が3分の2だったんです。でも身近だっていうのが3分の1いたんですね。エイズに対するイメージは「普通のいい人たち」が持っているイメージに近くて、つまり悪意のある「やばいよねあれ」っていう感じではなくて、病気で大変な問題なんだろうっていう感じでした。客観的にエイズっていうものが問題ではあるととらえていて、アフリカとかタイは大変なのよねとかというレベル。それから、わりと最新の情報にはなっていない。死んじゃうのか死なないのか分からないというイメージを持っている人が非常に多いというのがわかったんです。

それに対してどういうふうに情報発信してあげると、今のエイズに対するイメージを変えてもらえるのかなというのはすごく意識してやっています。たとえば、治療ができるんですよとか、慢性疾患として生きていらっしゃる方がたくさんいるんですよとか、それは身近な問題として考えることなんですよっていうような情報発信をしてきているんですね。でも身近な問題っていうふうにざっくり捉えてしまうと無理な人もいます。たとえば自分はもうまったくセックスしないのにすごい身近な問題ですって言われてもあんまりリアルに感じられないっていう人に、いやいや身近ですって押し問答してもしょうがない。だったら社会貢献として割り切ってもらいたいんですから、12月1日だけはレッドリボンつけてくださいって言うてみたら、つけます、つけますっていう反応だったりするんです。

徳島にある工場からレッドリボンをつけたいので送ってくださいってメールをもらったことがありました。全部門長に連絡を投げてレッドリボンをつけたいという人を集めますからって。工場長自らつけてくださってね。工場長はお客さんにも会う機会も多いので、サンスターはこういう活動をしていますって説明いただいたりとか、一体感をもってやっていただいたんです。その時は予防財団への寄付でいただいたリボンだったんで馬鹿でかいんですけど、責任のある地位にいる方が、それをバシッとつけてお客さんのところで説明したいんだって言うてくれたのはすごくうれしかったですね。その時期ってエイズ関連の報道も増えるじゃないですか。「エイズの問題がニュースに出ると気になるようになりました」とメールをまたくださったりしてね。レッドリボンの呼びかけも、自分の周りの人からパラパラリアクションがあるだけかなと思ってたんですけど、うれしい誤算がありましたね。

★今まで何年か取り組んできて、これは参ったなとか、どうしようか迷ったことはあまりないんですか？

結局会社の中で、自分一人だけがエイズに関して極端に専門家なんですよ。だから、エイズのことは吉田がやっているみたいなのがどうしてもできちゃうんです。それをもっと埋めていかなくちゃいけないなというのを、悩んだりします。ある程度自分が先頭にならなければならぬっていうのは分かっているんですけども、それと同時にどうやって社員を巻き込むかです。たとえばうちの日本にいる1500人の社員が、これを問題だと思って意識が変わるってすごいことじゃないですか。1500人が納得してくれる活動をしたいなと思っているからこそ、そこは難しさを感じる場所です。外に向かってお金を使って何かやるっていうのは、やればできちゃうっていうのがあるんですよ企業としては。

でも2年間活動してきて、エイズはサンスターがやっている問題だし、何か身近な問題として自分もできるこ

とがあればやってもいいよっていう人が増えてきたという実感はあります。去年の秋くらいかな、エイズの活動のことで社内にメールを打つときに40人くらいだったんですね。少なくとも40人がわたしは味方だと思ってメール打っているんです。そういう広がりを実感できることがやっぱりうれしいですね。

★社内に対する活動として他に何かやってきたことはありますか？

研修会をやっています。そろそろ新入社員研修が企画されているころだと思うと、人事に言ってエイズの研修どうですかねと働きかけてみたりとか、あるいはもうちょっと広いCSR（企業の社会的責任）というテーマで話をするので、そういう中でエイズの話もちょっとしたいんですけれどもという形で研修の時間をもらうようにしています。今は継続的にみんながそういうことを意識してくれるように社内に対して働きかけをしている途中でもあります。

あと職場懇談会という、職場ごとに、たとえばこのオフィスで集まって職場の問題を話し合うっていうのがあるんです。たとえばあそこのドアが壊れてるといった問題と、経営陣からのトップダウンの話の両方が1時間とかで行われるんです。そのテーマの一つとしてエイズの研修というのを入れています。

組合研修もあります。サンスターグループ従業員組合っていう上部団体のない組合なんですけど、日本全国の組合の支部役員に対する研修会があって、そこで1時間半くらいもらってエイズ研修をしたんですね。そのあと組合が協力できることがあったらしたいですって言うてくれていて、忘年会の場で12月1日に重なったりするとみんな受付でレッドリボンをつけてくれたりするんです。「できることは限られているけど」という形でも協力をしてくれるようになりました。

★どんな研修をするんですか？

研修では、一番最初は基礎知識。そもそもどういう病気なのかとか、感染経路はどういうものなのかとか、統計的なこととかをやって、サンスターがなんでそれに関わっているのかっていうのを理解してもらってプレゼンテーションをやります。あと、企業の社会貢献活動として、環境とか子供とかは理解できるけど、なんでエイズなの？っていう人がけっこういることがわかったので、他社さんの例を紹介したりもします。リーバイさんのショートフィルム集や、ロシュさんのエイズウォークを紹介したことがありますね。

★サンスターでの取り組みは他社となんとなく違うかなという気がするんですけど。

うちは、トップダウンではなく、社員が提案して始めたことというのが基本的に大きいんですね。手を挙げた人にやらせようというサンスターの企業風土があって、かつ従来と違う形で自分たちが企画する社会貢献活動をしたいという思いがあって、やりたいっていう人がいたということなんだと思います。

★活動をしていて意外な展開があったりすることもあるでしょうね。

わたしが働きかけていたからではないんですけれども、実はうちのタイの工場でエイズ対策をやっていたというのがありました。去年から社員が発案してエイズの孤児院にいらしています。施設のスタッフの人たちが社員に研修もしてくれるんです。エイズっていうのはちゃんと自分たちの問題として取り組まなくちゃいけないということを学びつつ、「徳を積む」というタイの独特のやりかただと思うんですけど、寄付をしたりとかするんです。やっぱり問題だと思っている人は自分たちで取り組んでいるし、それだったら協力し合ってそれをグローバルに広げていくこともできるだろうということに気づいたり

しました。

★今後、こんなことができればいいなと考えていることがありますか？

やはりサンスターがある程度日本で知名度が高い日用品を作っている、サンスターと言えばあの歯磨きで知っている会社だからこそできることがあると思うんですよ。HIV／エイズというのに対してみんなが漠然と持っているものとは違う面を、サンスターの取り組みを見てもらうことによって、少し身近な問題と感じてもらったりとか、みんなで考えてみようという雰囲気を作る追い風になるようなことができればいいかなと。



会社の玄関に巨大なレッドリボンが

うちはグローバルな会社で、社員の半分が海外にいます。北米、タイ、インドネシア、シンガポールと、あとヨーロッパです。そういう意味ではグローバルな安全衛生活動っていうのは、サンスターグループとして取り組んでいかなければいけない課題なので、そのうちの一つのテーマとしてHIV／エイズっていうのは時代の要請でもあるし、きちんとやっていかなければいけないということを、社内で投げかけているんです。それはトップのほうもある程度了解してくれているので、具体的な形、たとえばガイドライン作りをするとかまで落とし込んでいければと思っています。それがあれば研修活動などをする際のよりどころにもなると思うんです。

もうひとつは、日本でピアエデュケーションをやりたい。ピアエデュケーションをやるためのピアエデュケーターの養成をやりたいんです。私がいなくて何も起こらない状況ではなくて、いろんな人ができる状況を作りたいんです。わたし一人がやってしまうと、わたしに聞いてっていうことにどうしてもなってしまうので、わたしも含めてみんなで同じ研修を受けて、ピアエデュケーターとしてみんなでやっていくというような活動にできるといいなと思っています。

★スタートするときというのは力技でヨイショと動かすけど、その次の段階の展開や継続のことを考え始めているんですね。

そうです、そうです。社内にある枠組みの中にHIVのことをちゃんと位置づけていくというふうなアクションをしているのがひとつ。それから、やっぱり文化にしていくなというかな、企業文化に。そうしないとやっぱり続かないなというのは痛感しますね。

それから、事業との関連についても考えていかなければいけないと思っています。うちの会社の一つの事業についての考え方として、マウス＆ボディというのがあって、口の健康と全身の健康がつながっているという考え方です。具体的な研究が進んでいるのは、歯周病菌が全身疾患たとえば心疾患を悪化させる要因になっているとか、低体重児の出産を増やすきっかけになっているといった因果関係などでしょうか。お口は体の一部なのに、オーラルケアだけ歯科医もそうですが、わりと切り離されて考えられているけれども、もっとそこが関係していることを意識していこうというものです。エイズも全身疾患でそこはすごく関係しているはずなので、会社の事業としてのビジョンとエイズの問題が必ずしも無関係ではないっていうのを、社内ですべて研究の人に理解してもらうために言うようになりました。

第20回のエイズ学会でサンスターが協賛できたのも、マウス＆ボディがあったからなんです。うちは歯科医院の先生方のための通信販売をやっているんですけれども、そのDMで学会のチラシを入れてもらったりしたんです。マウス＆ボディ、治療とも関係あるし、社会貢献でもあ

るし、だからぜひステーキホルダーである歯科医の先生方にも声をかけようということで納得してやってもらったんです。事業に直接の関連はないサンスターだけどやりますという部分と、関連をつけながらやっぱり社内を説得していく部分と両方ありますね。

あと、去年から Empowering Women というテーマでウェブサイトのコンテンツを作っているんです。女性の人生、健康、キャリアについてのインタビューシリーズをしているんですけれども、これにも関連して来年は女

性とエイズっていう問題で、キャンペーンみたいなことをできないかなと思っています。HIV とともにある生活を伝えることによって、HIV を身近な自分の生活のいち要素としてとらえてくれるような情報発信ができないかなと考えているんです。エイズを病気として取り組んでいるだけでなく、文化活動とからめることによって、HIV の印象を違う形で出していただけたらいいと思います。

★今後、社内外に活動が広がっていくといいですね。きょうはどうもありがとうございました。

ネストより 「弁護士と話そう」開催

第2回目の専門家と話そうシリーズ「弁護士と話そう」が、3月16日に永野靖弁護士（東京南部法律事務所）をお招きして行われました。14名が参加して会場であるネストは満席、充実した会となりました。

第1回目の専門家と話そう「歯科医と話そう」に続いて、第2回目は「弁護士と話そう」です。普段からHIV陽性者の相談を受けている永野靖弁護士（東京南部法律事務所）をおむかえしてお話をいただきました。

まず最初は法律にまつわる基礎のキから。「民事事件／刑事事件／行政事件とは」「裁判官／検察官／弁護士は何をする人」「訴訟／調停／交渉とは」といった基本的なことをわかりやすく説明していただきました。法律についてあまりよく知らない人から、詳しい人まで参加していたと思いますが、基礎のキから始めていただいたことでとても理解がしやすくなったように思います。

後半は「仮想Q&A」。過去の事例に基づいて仮定の質問を作成して、それについて永野弁護士に法的な見方とその解説をしてもらうというもの。会社側の知権権利と従業員のプライバシー、感染リスクを法的にどう捉えるか、婚姻関係のないパートナーシップ、債務整理などといった現実的な課題を仮想事例解説というかたちで、わかりやすくかつ踏み込んでお話いただきました。

【仮想 Q&A】

Q1「現在、サラリーマンとして勤務しています。何度か入院をしたり、体調不良が続いています。職場から診断書の提出を求められたりしました。主治医に配慮ある記載で書いてもらい、難なきを得ています。勤務先には、本当の病名を伝えないといけなのではないでしょうか？」

Q2「最近感染がわかりました。過去に性行為があった人のなかで、可能性があるとされる相手に感染を知らせました。非常に拒否的な反応が返ってきました。知人の陽性者から、相手に受け入れられたという話を沢山きいていたので、とても驚いています。『もしも、自分の感染が判明したら、損害賠償を請求する』と迫られました。自分にはそのような義務があるのですか？」

Q3「パートナーとは、結婚も養子縁組もしていません。自分の具合がわるくなった時の病院の面会はなるのでしょうか。また、もしもの時にパートナーに何かを残すことが可能でしょうか？具体的な方法について教えてください。」

Q4「いろんな借入れが重なって、もうどうにもならない状況になってしまいました。銀行系のカードなども借り

尽くしてしまい、サラ金などにも、そろそろいかないと支払いが難しくなってしまうそうです。こういう事って、どこで相談にのってもらえますか？」

最後に、実際に弁護士に相談をするにはどうしたらいいか、費用や、電話相談などについて具体的な情報もありました。頭の整理と、役に立つ情報を得ることができ、充実した2時間の勉強会となりました。（報告：矢島）

参加者感想文

正直なところ、今すぐ弁護士の方に相談すべき困ったことがなかったのですが、近い将来きっと困ったことが発生するのではないかと漠然とした不安があったので、参加させていただきました。私は法律の知識はまったくなく、弁護士の方は遠い存在のように思っていたのですが、私たちの目の高さになった丁寧でわかりやすい説明で、たいへん身近に感ずることができました。

たった2時間でしたが、生島さんがいかにもありそうな（私たちが聞いたような）ことを題材にしてくださったので、短時間で盛りだくさんの内容を学ぶことができました。内容の濃い、充実した2時間でした。

今後、困ったときにはどこに（だれに）相談すればよいかを具体的に紹介してくださったので、大変心強かったです。でも、本来なら、相談しなければならないような困ったことが発生しないのが一番よいのではないかな… 永野先生、そしてふれいす東京のスタッフの皆さま、ありがとうございました。（TH）

「弁護士と話そう」という名目で僕がどんな思いで参加したのでしょうか。僕が参加したきっかけは、ある事がきっかけで、どうしても弁護士の話を知りたくて、参加しました。一体、どんな話があるのやら？という期待感と不安感をもって聞きましたが…。

百聞は一見にしかずという言葉がありますが、参加したことによって、まさにその通りだと思いました。自分だけだ！と思っていた悩みは、皆の共通の悩みだと分かって、一人じゃないんだと改めて実感しました。

弁護士がより詳しい情報を提供してくれた事によって、自分の視野が広がったことはいまでもありません。僕が、この「弁護士と話そう」に参加したことで、溢れすぎるほどの幸せをもらいました。「弁護士と話そう」を企画してくれたスタッフの皆さんありがとうございました。（真猿）

活動報告他(2007年1～3月)

— 各部門より —

ホットライン

エイズ電話相談（ぶれいす東京および東京都委託）

◆ホットライン・ミーティング他活動状況（）内は出席人数

1月	12日	東京都電話相談連絡会（2名）
	14日	第11回マニュアルミーティング（3名）
	21日	世話人会（6名） スタッフミーティング（21名） 有志昼食会（17名）
2月	26日	東京都エイズボランティア講習会（6名）
	4日	第12回マニュアルミーティング（5名）
	8日	平日フォローミーティング（2名）
	9日	東京都電話相談連絡会（2名）
	11日	HL活動報告書の入力作業打ち合わせ（5名） HL部門事前オリエンテーション（1名） 活動報告書入力業務打ち合わせ（5名）
	18日	世話人会（6名） スタッフミーティング（18名） 有志昼食会（14名）
	25日	追加HL部門別研修（第1日） （10名+研修生2名） 活動報告書入力業務打ち合わせ（3名）
3月	9日	東京都電話相談連絡会（2名）
	18日	世話人会（6名） スタッフミーティング（20名） 有志昼食会（14名）

◆相談実績報告

— ぶれいす東京エイズ電話相談 —

	1月	2月	3月
日数(日)	4	4	4
総時間(時間)	16	16	16
相談員数(のべ人)	5.0	5.5	4.5
相談件数(件)	37	38	45
うち(男性)	35	33	38
(女性)	2	5	7
(不明)	0	0	0
(陽性者)	2	1	1
1日平均(件)	9.3	9.5	11.3

— 東京都夜間・休日エイズ電話相談 — (委託)

	1月	2月	3月
日数(日)	12	12	14
総時間(時間)	36	36	42
相談員数(のべ人)	27.0	32.5	38.5
相談件数(件)	261	248	265
うち(男性)	218	214	204
(女性)	42	34	61
(不明)	1	0	0
(陽性者)	0	0	2
1日平均(件)	21.8	20.7	18.9

1月～3月の相談件数は、ぶれいす東京と東京都の件数を合わせると、1日当たり30件に達しています。相談員はひっきり

なしに相談を受けている印象だったと思います。件数増加の一因として、検査関係の相談が40%以上になっていることが上げられます。特に行政によってウィンドウ期の判断基準にバラつきがあることは、受検者が混乱する原因です。現状では受検者はネット情報で様々な情報を得ることができるので、自分の検査の信頼性に不安を感じているのです。全国的な判断基準が求められています。（報告：佐藤）

ぷ☆PEP

若者による若者のための予防啓発活動

★ミーティング・その他活動（）内はぷ☆PEP参加人数

1月	9日	定例ミーティング（6名）
	31日	学会ミーティング（2名）
2月	15日	ぶれいす東京事務局会議（1名）
3月	10日	定例ミーティング（2名）
	15日	ぶれいす東京事務局会議（1名）
	22日	アースデーエイズビレッジインタビュー（2名）
	23日	東京都エイズ予防啓発拠点事業説明会（1名）

★活動方針について

若者による若者のための予防啓発活動として、これまで主に中学生から大学生までの若者を対象に活動してきたぷ☆PEPですが、現在、もう少し対象を広げてみてはどうか、という意見がメンバー内から持ち上がってきています。20代前半のメンバーもいますが、今までぷ☆PEPを引っ張ってきたメンバーが30代にさしかかり、はたして、中学生・高校生と同じ目線でプログラムできるだろうか、peer（仲間・対等・同じ立場）として話ができるだろうか、という疑問がメンバー内から挙げられるようになったからです。

「ピア」とは何か、また対象者を若者だけに絞ることについてメンバー内で話し合い、4月から、主に若者を対象とするこれまでの「ユースぷ☆PEP」（仮称）と、主に30代前後を対象とする「ミドルぷ☆PEP」（仮称）の二輪で活動していくことに決めました。

メンバーがどちらに参加するかは、今のところ年齢によって振り分けられるのではなく、あくまで自分がどの年代を対象に活動したいか、どの年代の対象者とならピアでいられるか、といったことを基準にしていって、現在そのメンバー数は、ユース3名、ミドル4名、となっています。

直近のイベントとしてはアースデーエイズビレッジ（4/21、22）でのブース出展があり、イベント来客者の年齢層では、30代が多いと思われるので、ミドルぷ☆PEPの初イベントとして準備中です。（報告：じっつー）

バディ

陽性者のための直接ケア・派遣プログラム

◆バディ担当者ミーティング参加スタッフ数

（第1木曜11:00～ 第3木曜18:30～）

1/11	2人	1/18	4人
2/1	3人	2/14	5人
3/1	2人	3/14	4人

※その他個別のミーティング 7件

◆利用者数

8カ所の病院に通院中、もしくは入院中の19名の方にのべ21名のバディスタッフを派遣

◆活動内容 (2007年3月末現在)

派遣継続中	19件
在宅訪問	12件
病室訪問	2件
在宅の電話のみ	2件
派遣休止	3件

◆1月～3月の派遣調整

3件

◆今後のミーティングの日程

・午前11時～	・午後6時30分～
4月5日(木)	4月23日(木)
5月3日(木・祝)	5月17日(木)
6月7日(木)	6月21日(木)
7月5日(木)	7月19日(木)

◆バディの現場から

新しい年度に突入し、昨年度のバディの活動の記録票をもとに、活動報告書のまとめの作業を始めています。読み返していくと、昨年度も色々な方が新たに活動に加わり、また長年活動いただいた方が活動を終了したり、と多くのことがあったと改めて感じました。このプログラムはバディの皆さんの協力があったのことで、毎年のことながら感じております。皆様、いつも活動にご協力いただき、本当にありがとうございます。普段は個別の活動になるため、なかなか他の方に見えづらい活動になりがちですが、皆さんからいただいた記録票を生かして、報告書は少しでも見やすい、わかりやすいものにまとめていければと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

(報告：牧原)

ネスト

陽性者とパートナー・家族のためのスペースとプログラム

◆ネスト利用状況

	オープン日数	延べ利用者数	(うち新規)(*ファシリテーターなど)	
1月	23日	259名	(19名)	(6名)
2月	23日	216名	(10名)	(11名)
3月	26日	276名	(18名)	(9名)

(*はファシリテーター、web NEST 運営委員、お茶会、講習会などの企画・運営などの役割を担っているネスト利用者)

◆カフェ・ネスト

1月	4回	46名
2月	4回	30名
3月	3回	29名

◆ピア・グループ・ミーティング (PGM)

- ・新陽性者 PGM 第32期 (参加者7名)
1/6 1/20 2/3 (修了)
- ・新陽性者 PGM 第33期 (参加者5名)
3/8 3/22
- ・陰性パートナー・ミーティング
1/13 (4名) 2/10 (4名) 3/10 (3名)

・ミドル・ミーティング

1/13 (10名) 2/10 (11名) 3/10 (12名)

・カップル交流会

1/7 (16名)

◆学習会 / イベント

- ・3/3 ネスト庵早春のお茶席 (参加者14、ご亭主1)
- ・3/16 “専門家と話そう” シリーズ第2回「弁護士と話そう」
ゲスト：永野靖さん (東京南部法律事務所) (参加者14名)

◆ミーティング (陽性者メンバー、ぶれいす東京スタッフほか)

- ・新陽性者 PGM ファシリテーター・ミーティング
2/6 (7、3)
- ・web NEST 運営委員会
1/23 (2、2) 2/20 (2、2) 3/20 (2、2)
- ・ネスト世話人会
1/31 (1、3) 3/15 (1、3)
- ・カフェ・ネスト運営ミーティング
2/28 (1、7)

◆ネスト・ニュースレター

1/15	1月号発行
2/13	2月号発行
3/9	3月号発行

◆学習会「弁護士と話そう」開催

HIV陽性者をとりまく専門家を招いて行われる学習会“専門家と話そう”シリーズ、第2回は3/16に弁護士の永野靖さんをゲストにお迎えして、14名が参加して行われました。詳しくはP12。(報告：はらだ)

Gay Friends for AIDS

ゲイによるゲイ・コミュニティ向け活動
<http://gf.ptokyo.com>

◆Gay Friends for AIDS 電話相談

1月	11件 (平均2.75件)
2月	8件 (平均2.0件)
3月	12件 (平均2.4件)

◆VOICE 07 FINAL 開催しました！

Gフレのイベント、「VOICE」がついに終わりを迎えました。その詳細は特集ページ (P 5-7) にて。

◆VOICE終了に伴い、現在新しいイベントをミーティングで考案中です。

(報告：タカシ)

HIV陽性者への相談サービス

◆相談実績 2007年1～3月

2007年	1月	2月	3月
電話による相談	34	75	83
対面による相談	45	52	69
E-mailによる相談等	61	56	51
うち新規相談	20	19	19
※メール新規は含まず			

◆1～3月の新規相談者の属性 58人（男性：53、女性：5）

陽性者： 45人（男性：41 女性：4）
確認検査前： 3人（男性：3 女性：0）
パートナー（元）： 5人（男性：5 女性：0）
家族： 1人（男性：0 女性：1）
友達： 2人（男性：2 女性：0）
その他： 2人（男性：2 女性：0）

◆1～3月新規相談者の情報源（N=58）

WEB： 26
検査所／保健所： 6
パートナー： 5
陽性者の知人： 5
医療従事者： 4
以前から知っていた： 3
友達： 2
行政職員： 1
職場の上司： 1
電話相談： 1
他のNGO： 1
ゲイバーのママ： 1
不明： 2

◆1～3月の新規相談内容

【ミーティング参加等】

- ・PGM/パートナーミーティング/カップル交流会/既婚者ミーティング等への参加希望。
- ・3年前に告知。他の陽性者にあってみたいと思い連絡。
- ・パートナーにミーティングへの参加を勧められたが、心の準備ができていない。
- ・学習会の際に、聴覚障害者のための手話通訳をいれて欲しい。
- ・関西でぶれいす東京と同じような団体はないですか？
- ・ネットをみて、スピーカーなどの活動をしてみたいと思って来た。

【検査や告知後】

- ・昨日、判定保留だった。
- ・告知時に保健所から、遠いけど電話で相談できるからと紹介された。
- ・カリニ/カボシなど発症で感染に気づいた。
- ・最近、感染が判明。パートナーへの告知で悩んでいる。
- ・今日確認検査の結果を聞いた。
- ・近々、病院にいく予定。今後のことが不安。
- ・保険証から会社を割り出して電話がきた。
- ・迅速検査で「疑陽性」、確認検査の結果でも陽性だった。
- ・皮膚症状で入院。HIVの検査を軽い気持ちで受けたら陽性。ショックだった。
- ・セックスした相手から「自分は陽性」とメールをもらった。

【人間関係】

- ・彼氏がHIV陽性者。誰にも気持ちを話せないでいる。
- ・セクフレへの告知で悩む。
- ・元パートナーのストーカー行為に戸惑い。
- ・パートナーが陽性、自分は陰性だった。今後のセックスは？
- ・HIV陽性で二人の結婚が揺れている。
- ・パートナーから告知を受け、二人で来所した。
- ・感染を知らせて、セックスをしていた相手の感染が判明。
- ・元彼の感染が判明し、自分も検査をうけたら陽性であった。
- ・家族が陽性だった。自分はどのように接したらいいのだろう。

- ・感染告知後、妻に告知するタイミングで迷っている。
- ・感染者のパートナーの通訳で来所した。

【医療など】

- ・地域の医療機関に通院しているが、待ち時間が長い。
- ・医療従事者との関係があまりうまく築けない。差別なのかどうか。
- ・特殊な治療の受け入れ先を探している。
- ・過去に陰性の告知を受けていたが、リンパ腫で陽性が判明。
- ・術前検査で陽性だった。「手術はできない」といわれた。
- ・肛門科でセクシャリティを話すと医師の態度がかわって、検査を勧められた。

【生活や福祉】

- ・匿名検査で陽性。医療費のことや、会社にばれないかと不安で通院できない。
- ・感染告知から7年たっている。手帳制度や生命保険について知りたい。
- ・発症で告知、退院後の生活に困窮。
- ・ゲイのパートナーと同居。生活保護の申請ができない。
- ・既婚者。保健所の検査で陽性だった。日常の家族への感染は。
- ・海外にて陽性が判明。帰国を考えている。情報が欲しい。

【メンタル】

- ・感染がわかって3年目、最近、外にでようかと思うようになった。
- ・友達の陽性者が「死にたい」というが、どうつきあったらいいのか。
- ・ストレスがたまると、セックスドラッグをつかっていた。
- ・最近、時々会社を休んでいる。友達の陽性者のすすめで来所。
- ・区の保健師の勧めで来所。引きこもりぎみ。
- ・女性の陽性者。告知から3年経過したが、閉塞感を感じている。

【就労】

- ・職場で出血があった場合の企業の責任の範囲は？
- ・体調がわるく、本業を辞め、パートで働くが収入が安定しない。
- ・援助職に興味があるので、資格を取りたい。
- ・医療従事者で感染の可能性を強く自覚しているが、未確認。
- ・今度就職する。職場への個人の健康情報の流れ方について知りたい。
- ・入院で感染が判明。職場の上司の見舞いにドキドキした。
- ・職場に提出するための検診で陽性が判明。

（報告：牧原／福原／生島）

研究部門

厚生労働省 厚生労働科学研究

- ◆「日本の性娯楽施設・産業に係わる人々への支援・予防対策の開発に関する学際的研究」（2006年度から）

大阪府立大学の東優子さんが主任研究者となって行われている研究で、池上と生島が参加しています。小学館と連携して、同社の雑誌『週刊ポスト』の男性読者を対象に、「性娯楽施設・産業を利用する男性に関する研究」に関するアンケート調査を行い、2千通以上の回答を得たため、分析結果を研究班の報告書にまとめました。

（報告：吉田）

特定非営利活動法人ぷれいす東京 2006年度総会・活動報告会のご案内

恒例の総会・活動報告会を今年も開催します。部門報告は、それぞれの部門から日頃の活動を現場感覚いっぱいにお届けします。多様なスタッフの登場が活動の広がりを感じさせてくれます。

また、トークコーナーのゲストには、ダルク女性ハウス代表の上岡陽江さんをお招きして、薬物依存と自助グループ活動についてお話しいただきます。

皆様、お楽しみに、ぜひご参加ください。

【日時】2007年5月26日(土)

**【会場】ECO としま 豊島区立生活産業プラザ
多目的ホール(8階)**

豊島区東池袋1-20-15(池袋駅東口より徒歩7分)
Tel.03-5992-7011

第1部 総会 13:10～13:40

* 総会の議決に参加できるのは正会員のみです。活動会員、賛助会員の皆様にも総会にご出席いただけますが、議決権はありません。あらかじめご了承ください。

第2部 活動報告会 14:00～16:50

* どなたでも参加できます。ぷれいす東京の会員・賛助会員・寄付者・ネスト利用者・招待者は無料。それ以外の方は、資料代として1000円いただきます。

活動報告会・プログラム

- ・あいさつ
- ・部門報告
ホットライン、ぷ☆PEP、パディ、ネスト/PGM、Gay Friends for AIDS、HIV陽性者への相談サービス、研究部門、事務総務
- ・トークコーナー 上岡陽江さん
1957年生まれ。ダルク女性ハウス代表。精神保健福祉士。薬物・アルコール依存症、摂食障害からの回復者であり、回復プログラム、自助グループを実践しつづけている。施設の資金繰りに日々悩みつつ、仲間とともに運営に奮闘をつづける。エレフ・アント・カシマシの熱狂的ファン・おっかけ、ライブはかかさない。実はこの後も日比谷でのコンサートにかけつける予定だとか。著書に『虐待という迷宮』(共著：信田さよ子 シャナ・キャンベル)

* 17:30より懇親会が開催されます。どなたでも参加可能です。(会費制)

* 当日の連絡は下記携帯電話までお願いします。

ぷれいす東京携帯電話
090-6310-8981(昼 12:00～)



■ ぷれいす東京より 賛助会員入会・寄付のお願い

HIV陽性者の数は年々増え続けています。新たな治療法は開発されていますが、治療を続けながら生活する上では様々な問題が発生しています。HIV陽性者とその周辺の人たちへの支援、コミュニティとして取り組んでいる予防活動等、私たちの活動へのニーズがますます高まっており、必要な運営資金も増え続けています。よりよいサービスやプログラムを継続するために、ぜひ私たちの活動を応援してください。

賛助会員入会のお願い

継続して応援してくださる方は賛助会員になってください。

--- 賛助会員になるには? ---

メールか電話/FAXで賛助会員入会をお申し込みください。折り返し、ぷれいす東京の案内と賛助会費専用の振込用紙をお送りします。

E-MAIL info@ptokyo.com

電話 03-3361-8964 FAX 03-3361-8835

年会費 個人賛助会員(一口) 1万円

団体賛助会員(一口) 10万円

寄付のお願い

そのほか随時寄付をお受けしています。ぷれいす東京の活動をぜひともご支援ください。ご寄付はいくらでも結構です。匿名でも可能です。

--- 寄付の振込み方法 ---

◇ ぷれいす東京の活動全般に対する寄付

郵便局 郵便振替口座 No.00160-3-574075

特定非営利活動法人 ぷれいす東京 代表 池上千寿子

銀行 三井住友銀行 高田馬場支店 普通 2041174

特定非営利活動法人 ぷれいす東京 代表 池上千寿子

◇ HIV陽性者への直接支援活動「ネスト/パディ」への寄付

銀行 三菱東京UFJ銀行 高田馬場支店 普通 1314375

特定非営利活動法人 ぷれいす東京 代表 池上千寿子

◇ Gay Friends for AIDSの活動への寄付

銀行 みずほ銀行 高田馬場支店 普通 5507255

特定非営利活動法人 ぷれいす東京 理事 生島 嗣

■ 編集後記 ■

- ・ 地球にやさしい生活をはじめよう!...ということで、河川や海を浄化する作用があるというEM菌配合の洗剤を使い始めました。
(こんどう)
- ・ 今号は、16ページの拡大版。画像満載です!カラーでないのが残念ですが、少しでも臨場感をお届けできればいいのですが.....
(やじま)
- ・ LIVING TOGETHERというメッセージを生み出したVOICEが結核した。今後のGay Friends for AIDSの活動に期待したい。
(いくしま)

編集・発行: 特定非営利活動法人 ぷれいす東京

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-22-46 ザ・テラス304

TEL: 03-3361-8964(月-金 12:00~19:00)

FAX: 03-3361-8835

E-mail: info@ptokyo.com

ぷれいす東京HP: <http://www.ptokyo.com/>

Gay Friends for AIDS: <http://gf.ptokyo.com/>

web NEST: <http://web-nest.ptokyo.com/>

Sexual Health: <http://shw.ptokyo.com>